

# 北アイルランドにおける学校と生徒とコミュニティの歴史

## アラン・マッカーリー、キース・バートン

東京大学大学院 星瑞希

### 1、著者紹介

○Allan McCully

アルスター大学の名誉研究員



○Keith Barton

インディアナ大学の教授カリキュラム部門における教授、史学科における非常勤教授



### 2、論点

静的な歴史意識の調査と動的な教授カリキュラムに関する調査をいかに統合して調査計画を立てる事ができるか？

日本では修正主義言説を対象に研究計画を立てることができるか？

### 3、概要

本章では北アイルランドで中等教育段階（最初の3年）の253人の生徒の歴史に関する考え（idea）や、考えと学校ならびにコミュニティの関係性を調査した2人が互いに意見を交わす形式で進めていく。

#### Q1. 歴史意識に関する調査のモチベーションは何でしたか？誰が話し、探究したいですか？それはなぜですか？



・私たちが報告する研究は歴史意識という概念によって主導したわけでも、枠づけられたわけでもないことを言わなければならないが、研究の出てきた考えと関係しているし、私たちの研究は度々歴史意識のレンズを通した研究として参照されている。

・私たちの研究の始発点是对立が生じる深く分断された社会において歴史を教えることの実践上の困難にある。北アイルランドでは北アイルランドの過去の理解と今日的な政治的、文化的な問題に対して表明する態度に関係性があるとされている。

→私たちの関心は主に学校で学ばれる歴史がいかに家族やコミュニティの中で出会う歴史と接触するかであった。

・1990年代以降、英国における学校評議会歴史プロジェクト（SCHP）は対立する社会において歴史を教える際の有効な方略として国際的に認知されるようになったが、過去のポピュラーな理解に対する影響に関する実証的なエビデンスはほとんどなかった。



・学校の歴史と家族/コミュニティの歴史の関係性は学術上の問いはさることながら、北アイルランドの教師が直掩する非常に実践的な問題でもある。

・他の国では全ての国家は公式に認可されたナラティブを学校の教科書やその他の手段を通して子どもたちに伝達するという研究を耳にするが、北アイルランドは明らかにそのケースではない。北アイルランドでは国家の起源の物語などを学習せず、古代

の遺物の探究を行うため、学校の歴史とコミュニティの歴史の対立は、ナラティブ間にあるのではなく、2つの全く異なった過去の理解の仕方にあるのである。

・他の国では教師は自らの政治的信念をカリキュラムに課さなければいけないという驚きの研究に出会う事があるが、北アイルランドの教師は過去の党派的なナラティブを押し付けるのではなく、探究や証拠、多様な視点の尊重を吹き込む。

・教師は学校での歴史の学び方がコミュニティでのそれと対立していることを知っており、時に悲観的になるが、私の小学生の歴史理解を調査した研究では、その年において（コミュニティの過去に対する）歴史上の同一視はさほど深く定着していないことが明らかになった。

→子どもたちは強力なナラティブを纏って、教師が何も変革できない状態で中学に入ってくるのだろうか？

## Q2. 記憶、歴史、歴史意識に関してどのような概念を持っていますか？



・私たちは共に人々の歴史に関する考えは正式な歴史の学術からのみ生じるのではなく、家族やコミュニティ、メディアが形成する様々な影響を受けていることを認識しており、この考えは歴史と歴史意識に関する理論的地平を形成する

\*学術としての歴史とそれ以外の歴史という区別は、私たちの研究にさほど貢献しなかった。なぜなら、私たちはいかにして生徒の教育経験に影響を与える事ができ、そして

与えるべきかについて考える際にあまり助けとならなかったからである。

→歴史意識の理論を配慮することに多くの時間をかけずに、教育者はより複雑な社会において生徒が過去を思考することをいかに支援できるかについてより議論することにする。

・Wertsch の「文化的ツール」や Bakhtin の「内的説得力のある対話」を利用



・「集合的記憶」や「想像の共同体」などの考えの理論的な研究について説明することは有用であるが、私たちの目的は概念自体の理論的理解を深めることではなく、障壁を超え生徒の学習を前進させるためのより良いカリキュラムや教授ツールに貢献するためにその知見を用いることである。

例：指導する教員志望学生がアイルランド国民党のリーダーが射殺された場所を訪れた際に、統一党/プロテスタントのバックグラウンドを持つ女学生がいかに感情的な関わりが新たな歴史理解を生成する歴史批判を遮断するかを語った。

→分断された社会における私たちの研究から生まれた教授の目的は、1) 彼らの考えを形成する様々な要因について説明するメタ認知のプロセスに生徒を関わらせること、2) 染み付いた根拠の弱い立場に挑戦すること、つまり「神話の破壊」であり、歴史を政治や社会の目的のために使用させること、3) 学問の複雑さから逃げるのではなく、歴史的知識は暫定的であり、議論の余地があることを示し、教師には

生徒にコミュニティにおいて過去マジョリティとは異なるものを含めた過去の行動の全領域を紹介する責任があることを示す、4) 歴史を教えることは生徒を継続的に歴史事象と現在の対話に関わらせることで、過去と現代の状況と態度とを関係付ける事ができる。

### Q3. どのような研究方法を用いたか？



・北アイルランドでは文化的、政治的な所属を調査する際にアイルランド人、英国人、北アイルランド人などのカテゴリーを用いるが、これらは特に生徒の歴史理解に影響を及ぼす歴史にいかに出会っているか詳細に明らかにする事ができないため却下し、質的にデータを集め、青少年のために「エリシテーションテクニック」を用いた



・生徒にアイルランド、英国、世界の歴史に関するイメージのセットを渡し、グループ分けしてもらうように要求し、どのグループまたはイメージが最も自分や自分のことに一番関係しているのかを説明してもらった。

### Q4. この調査の意義と課題は何か？



・若者にとって公式な歴史の学習は歴史知識の1つの情報源にすぎず、コミュニティにおける支配的な（そして、感情的な）ナラティブに対して影響力を持つことに苦闘している事が明らかになった。若者は単純に学校の歴史もコミュニティの歴史も受容したり、拒絶したりするのではなく、自らの立場を構築するために両方を引き合いに出していた。

・しかし、コミュニティの影響は均一に普及しているとは見るべきではない。事実、生徒の同一視は学校タイプや、ジェンダー、地理的な位置、個人の文脈によって異なっていた。

➡歴史意識という概念を適用することは、私たちの研究が象徴的で、分断された対立する環境における生徒の歴史の経験は過去のイメージの「合併 (merging)」を含むという見方を支持したという点で有益である。

・一方で、生徒は批判的態度の促進や彼らが学校以外で出会わないだろう見方に関する洞察が得られる点で学校の歴史を価値づけていた。



・根本的な課題は特殊な環境での生徒の反応を捉えたに過ぎないこと  
・彼らは学校の外や仲間たちの間、他のコミュニティの環境では同じように心を開いて意見表明することはできない。

・私たちのインタビューは生徒が過去に対するより学問的なアプローチとみなすものと同様に、学校の外で発達した考えや関心をいかに持ち込んでいるかに関する幾つかの証拠をもたらしたが、生徒の学校での学習がいかに学校以外での思考に影響を与えているかは明らかにしていない。

### Q5. 残された課題は何か？



①1 つは、分断された社会の歴史を、「私たち」と「彼ら」に二分する二項対立の視点で提示する傾向があり、批評や統合の努力にもかかわらず、生徒が自分たちの物語に同調してしまうこと

②生徒の歴史受容における感情の問題



論争問題を生徒はいかに学か、そして教師にいかにして取り組ませるか。

・多くの教師が論争問題を避ける理由はわかるが、そうでない理由は明らかでない。